

‘スピード感’を生む考え方

10年かかることを**1年**でやろうと考えたら、**1年**かかることを**1ヶ月**でやる計画をしてみる。

1ヶ月かかることを**1週間**でやるには、**1週間**の結果を**その日**のうちに整理する。

創薬においてよく言われることに「**11年の歳月と1000億円**のお金をかけて、成功するのは**1薬/2-3万候補薬**」がある。いかにヒト臨床につながらない動物実験が多いかを物語る。そのために日頃の**R&D**における動物実験のやり方とそのデータ整理について、チーム内で討議する**スピード感**を上げるために述べた。

出会いは、運命である

同じ組織においてもAとBがともにR&Dに携わる確率は、 $0.0X$ である。さらにA、Bと共にCが加わる確率は、 $0.00X$ 以下となる。

複数の研究者が、同じ目標の仕事ができることは、天文学的な低い確率である。このような出会いこそ運命である。

製薬企業や医療器械開発メーカーにおけるR&Dには、種々の人間がかかわる。それぞれが他人任せにせずに相互に協力し合う体制こそ重要である。病める患者のために役立つものを生み出せる幸運を共有すべきである。

Double Onesを生み出す *The best 'one' & The only 'one'*

不治の病に挑むことは、いまだ誰もが成し遂げられない崇高な夢への挑戦である。したがって製品は「**世界で最も優れた**」、「**ただ唯一**」である。

先端医療の中でも不治の病への挑戦は、けた違いの読みと意気込みが必要である。**臓器移植**は、奇跡の治療として世に出たが、移植する臓器がなければ成り立たない。「**移植可能な臓器を作り出す**」とは、臓器移植に役立つ製品ではなく、ドナーとなる他者依存型医療を変えるまさに**ダブル・ワン**であることは間違いがない。